

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ホッコクアカエビ

学名 *Pandalus eous*

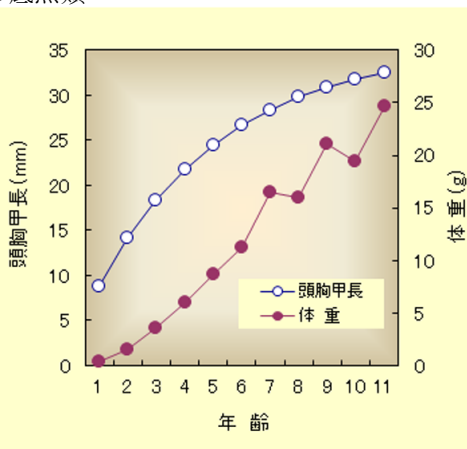
系群名 日本海系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 11年
成熟開始年齢: 雄性先熟の雌雄同体で、雄としての成熟は3歳、雌としての成熟は6歳
産卵期・産卵場: 2～4月で隔年産卵、成長に伴い400～600mの深みへ移動した後、性転換と交尾・産卵を行う、産卵を終えた抱卵個体は次第に浅い方へ移動し、主に水深200～300mで幼生の孵出を行う
索餌期・索餌場: 主分布域と同海域
食性: 微小な甲殻類、貝類、多毛類およびデトリタス等
捕食者: マダラ、スケトウダラ等の底魚類

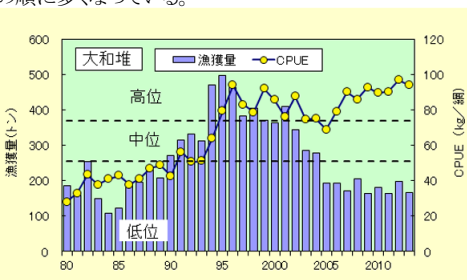
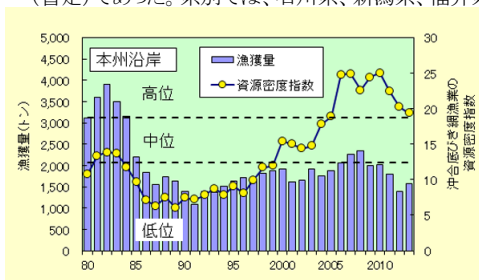


漁業の特徴

沖合底びき網、小型底びき網、かご網によって漁獲される。漁場の中心は水深350～500mにあつて、とくに能登～若狭湾を中心とする日本海中部海域が最も多く、ついで隠岐堆、新隠岐堆を含む山陰沖、および大和堆が主要な漁場となっている。このうち、大和堆周辺海域(沖合区)においては、沖合底びき網漁業が本州沿岸で禁漁となる夏場を中心に、本種を主な漁獲対象として3～4ヶ月程度操業される。

漁獲の動向

漁獲量は1982年をピークに減少傾向にあつたが、1995～2010年は概ね2,000～2,200トンでほぼ横ばいで推移した。近年では、2011年に2,000トンを下回り、2012年に1,593トンまで減少したが、2013年はやや増加して1,733トン(暫定)であつた。県別では、石川県、新潟県、福井県の順に多くなっている。

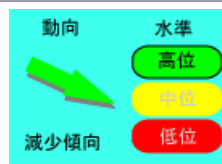


資源評価法

漁獲の50～60%を占める沖合底びき網漁業の資源密度指数(本州沿岸海域)およびCPUE(大和堆)を資源量指標値とした。また、その他の情報として、石川県と新潟県の小型底びき網漁業によるCPUE、能登半島以西の本州沿岸海域で行った調査船による採集結果、漁業または調査による漁獲物組成を考慮した。

資源状態

本州沿岸域は沖合底びき網漁業の資源密度指数、大和堆はCPUE値をそれぞれ最高値と最低値を3等分することで判断したところ、いずれも高位にある。したがって、本系群全体としては高位で、動向は、漁獲量全体の約9割を占める本州沿岸の資源密度指数の動向から、減少とした。



管理方策

本州沿岸では沖合底びき網漁業の資源密度指数は低下しているものの加入前資源が良好であること、大和堆は資源量指標値が高位で横ばいに推移していることから、いずれの海域においても現在と同程度の漁獲努力量を投じても現在の資源水準を維持できると判断した。ABC算定規則2-1に基づき、それぞれの海域についての水準(いずれも高位)、直近3年間の平均漁獲量、資源量指標値(本州沿岸海域は沖合底びき網漁業の資源密度指数、大和堆海域は同漁業のCPUE)を基礎として、ABClimを算出した。ABCtargetは、ABClimに0.8を乗じて算定した。

2015年ABC

管理基準

F値

漁獲割合

ABClimit	16百トン	1.0・本州沿岸Cave 3-yr・0.92 1.0・大和堆Cave 3-yr・1.02	—	—
ABCtarget	13百トン	0.8・1.0・本州沿岸Cave 3-yr・0.92 0.8・1.0・大和堆Cave 3-yr・1.02	—	—

- ABC算定規則2-1)に基づき、ABCは $ABClimit = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABCtarget = ABClimit \cdot \alpha$ で計算
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、bとlは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)である

資源評価のまとめ

- 本州沿岸では資源量指標値は低下しているため減少傾向としたが、加入前資源が良好であることから、現状の漁獲水準を維持することで高位水準を持続可能と判断した
- 本種を主対象とする大和堆漁場の資源は高位水準にあり、動向は横ばい

管理方策のまとめ

- 現状の漁獲努力量程度で今後も漁業を継続しても現在の高位水準を維持することは可能

執筆者: 養松郁子・上田祐司・藤原邦浩

資源評価は毎年更新されます。